

へいあんきゅうなかつかさしょうあと
平安宮中務省跡 現地説明会資料

令和5年9月23日(土) 10:00～12:00
京都市文化市民局
文化芸術都市推進室 文化財保護課
黒須亜希子

1. 今回の発掘調査について

所在地：京都市上京区中務町486
調査期間：令和5年8月21日～10月31日(予定)
調査原因：マンション建設に伴う
事業者：南海不動産株式会社
調査担当：京都市文化財保護課
支援団体：株式会社島田組
埋蔵文化財包蔵地名：聚楽遺跡・平安宮跡

調査地は、千本通と丸太町通の交差点より東に位置します。794年、京都へ都が移された頃、この地域には、政治の中心である平安宮が置かれて

おり(図1)、このうち調査地を含む一帯には、中務省という役所が設けられていました。

中務省とは、天皇の公務の補佐や、詔勅の宣下や叙位のほか、朝廷が行う職務の全般に関わる期間です。主要省庁(八省)の中でも最も重要な組織として位置付けられており、長官である中務卿は、平安時代以降はもっぱら四品以上の皇族から任命されることになっていました。

中務省には陰陽寮のほか、宮中の警備や行幸の警護役である内舎人、大蔵や内蔵寮等の出納を行う監物、駅鈴や鍵を管理する主鈴や典鈴等が所属していました。このうち、調査地は監物が置かれた場所にあたると考えられています(図2)。

2. これまでの調査成果

中務省跡は、平安宮の中でも遺跡の残りが良く、早くから発掘調査が行われてきました。調査の結果、中務省の周囲には築地が設けられており、その両側に溝が掘られていたこと、区画を南北に区切る東西溝が中央に設けられていたこと、内舎人と監物の間には通路が設けられていたことなどが確認されました(図3)。

このうち、調査区の東隣接地の調査では、南北に通る溝が2条確認されており、監物と鈴鑰の境であったと考えられます。ここでは築地塀の内側の溝(内溝)から平安時代前期の土器や瓦が多数出土しました。このため、今回の調査地でも連続する遺構の存在が予測されました。

なお、周辺の調査では「内舎人」・「口省」・「監口」などの官衙名を記した墨書土器が発見されています。

3. 今回の発掘調査成果

今回の調査では、南北に長い調査区を設定しました。試掘調査では平安時代と江戸時代の遺構面の存在が確認されていたため、その2時期の遺構を検出することを主な目的としています。

平安時代の遺構では、調査区の北端で東西に通る溝(溝100)を検出しました。幅1.5m、底面には起伏がありますが、最大深度は0.4mを測ります。溝は瓦や礫を含む土で埋められており、上位には平安時代の瓦が多数残されていました。これまでの調査から、中務省の北面の溝であると考えられます。

また室町時代には、調査区のほぼ中央を南北に通る溝が設けられており、さらにこれを埋めるように配置された戦国時代の土坑を確認しました。礫と瓦を詰めて強くたたき締めていることから、地盤を固める目的があったと考えられます。

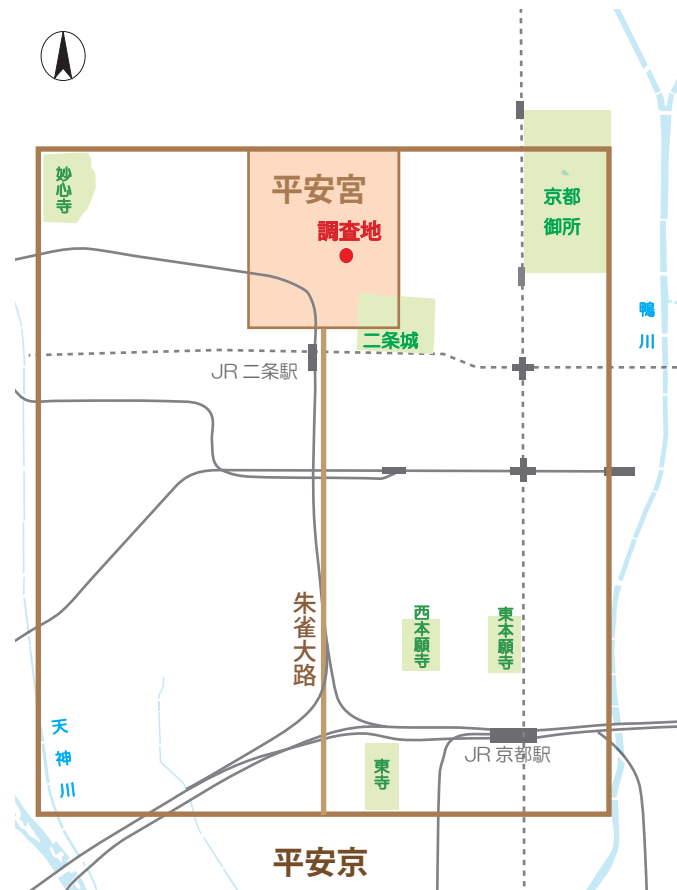


図1 調査位置

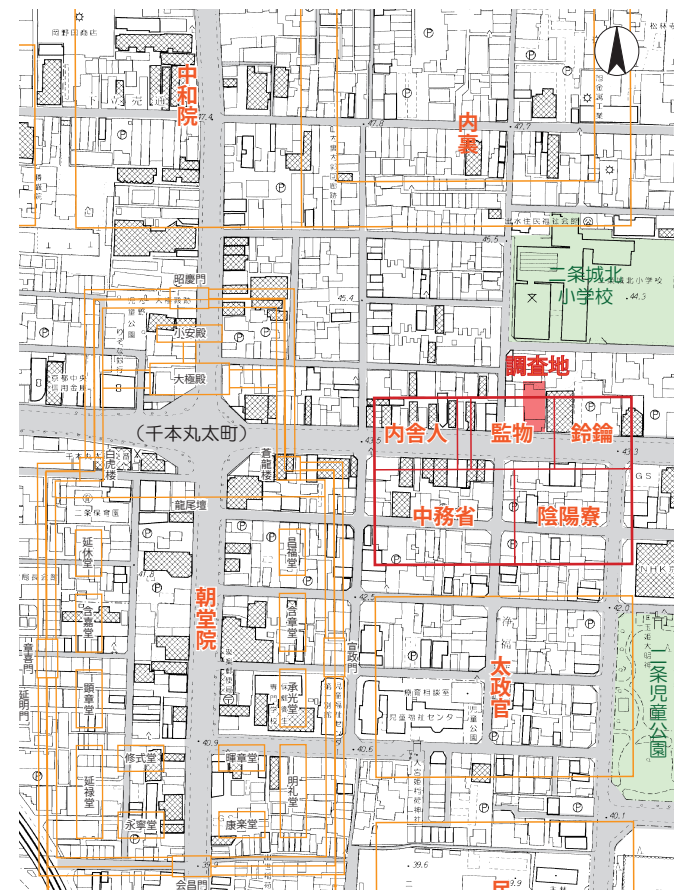


図2 平安宮の構造

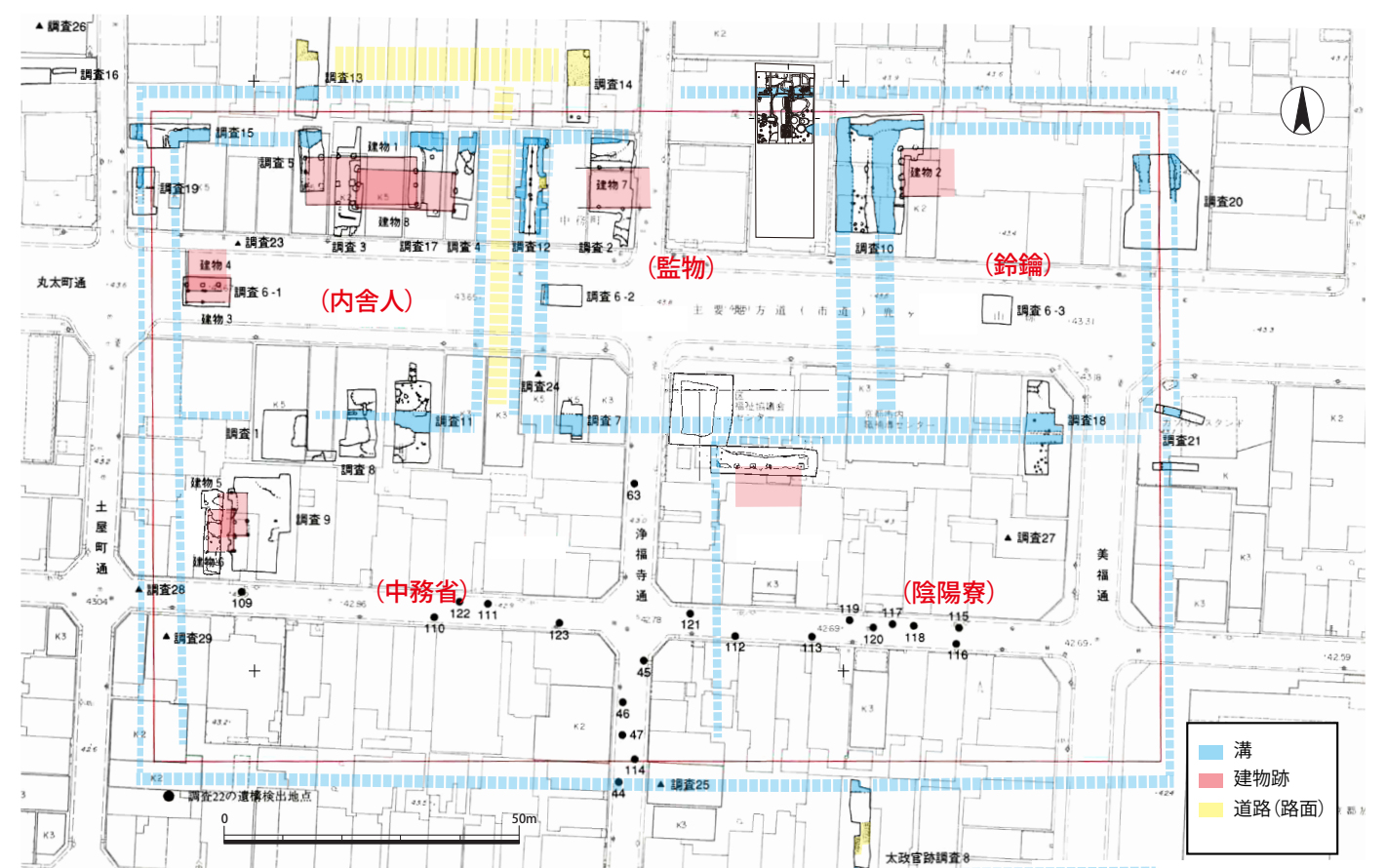


図3 中務省跡の既往の調査と復原